

武田国継が会津にくんだり、芦名盛氏に仕え、地頭になって清寧寺の守護神社「伊勢宮」の宮司を兼ねて会津に定着した。武田国継が伝えた大東流合気柔術の秘奥・小具足をその子孫が受け継ぎ、「会津御留技」となり、藩内にのみ伝えられた。

江戸時代になり、秀忠の第四子が保科正光の養子「保科正之」となり、山形から会津二十三万石の領主となる。保科正之は家光の遺命により将軍家綱の補佐役兼後見人となり、会津御留技の大東流合気柔術を殿中護身武道の「御式内・御敷居内」(おしきうち)に改定採用し奥勤務者、重臣に指導した。

保科正之は以後の会津の歴代藩主に小野派一刀流と御式内を継承させた。特に御式内の指導については上席家老の西郷家に委ねた。こうして御式内は西郷家で門外不出の秘伝として、会津の重臣たちに伝承されていった。

その後ほとんど世に知られずにいたようだが、明治になって元会津藩家老・西郷頼母(保科近恵)から武田家の末孫・武田惣角を経て、世に公開指導されるようになり今日に至る。」

- 17) 以下、脚註を付さない「」は、2006年7月9日より実施している、大東流合気柔術 一刻館(大崎司善館長)における参与観察にもとづく。
- 18) 2006年8月27日、大東流合気柔術光道、総師範錦戸武夫氏へのヒアリング。
- 19) 小山隆秀、「身体技術伝承の近代化—旧弘前藩領における近世流派剣術から近・現代剣道への変容について—」、青森県民俗の会編『青森県の民俗』第3号。この他、現代剣道における「摺り足」と古流における「撞木足」等の身体操法についても言及がなされている。
- 20) 松原隆一郎、『武道を生きる』、NTT出版、2006年、参照。
- 21) 2005年9月7日、琉球王家秘伝本部御殿手、聖道館館長上原健志氏へのヒアリング。上原氏の発言の多くは第12代宗家、上原清吉の言葉として氏が語ったものである。
- 22) 2005年9月7日、琉球王家秘伝本部御殿手、聖道館館長上原健志氏へのヒアリング。ただし、改変することなく技の伝承を行なうことと、現代格闘技への対処という観点から技の習得課程を再構築することは分けて考えられている(2006年12月24日、大東流合気柔術光道、総師範錦戸武夫氏へのヒアリング)。
- 23) 剣道経験者において日本刀の刀法が「引き斬り」と表現されることも、この例として考えられる。
- 24) <http://daitoryu.hp.infoseek.co.jp/keikonaiyou.htm> (最終更新日2007年1月19日) 参照。
- 25) 光岡英穂・甲野善紀、『武学探究 巻之二—体認する自然とは—』、冬弓社、2006年、43頁。

26) 光岡・甲野(2006)、61頁。

※本稿は研究会報告時のレジュメの一部に手を入れたものである。

2月28日(水) 第7回定例研究会

於：人文科学研究所

報告者：樋口直宏(心理学部)

報告テーマ：授業分析の現在

——量的研究から質的研究へ——

授業分析とは、授業を記録し観察しながら、授業者と参観者がその授業の特徴を分析することをする。授業を分析するにあたっては、教材、授業者による学習指導案、授業の逐語記録やVTR等が用いられる。授業記録は、一般に授業の開始から終了までの教師と子どもの発言をそのままの形で示す。初期の伝統的な分析方法としては、重松鷹泰によるものが知られている。この方法では、各人の個性的な思考のしかたを「思考体制の動き」と呼び、子ども全員の動きおよび特に抽出した子どもの動きについて、観察記録をもとに整理した。また、逐語記録以外の補助的手段として、カルテと座席表とを活用した分析方法もある。

1970年代には、フランダース(N.A.Flanders)による定量的授業分析法が、日本においても取り入れられた。そこでは、授業の録音とそれをもとに作成した逐語記録とを対照しながら、3秒ごとに教師と子どものすべての発言を区切り、カテゴリーに分類する上での一単位とする。そのうえで、それぞれの単位を発言に応じて10のカテゴリーに分類する。そしてそれらを10×10のマトリクス表に記入し、1-1から10-10までのどのカテゴリーがどれくらい出現したかを見ることによって、教師と子ども間の相互作用の様子を明らかにした。

このように、授業記録を符号化して統計的に処理することによって、授業の特徴を客観的に把握しようとする方法が行われる一方、授業の当事者

である教師および子どもの内面については、これらの記録からは知ることができないという課題も明らかになってきた。この点を補う方法として考え出されたのが、刺激回想法である。この方法では、授業をVTRで録画しておき、授業の直後に授業者もしくは子どもがそのVTRを視聴する。その際、VTRを見ながら授業中に考えていたことを授業の流れに沿ってできるだけ忠実に述べ、刺激回想記録を作成する。そして授業記録および刺激回想記録をもとに、授業者もしくは子どもの内面について、例えば熟練教師と初任教師の意思決定の違いのように、さまざまな角度から分析しようとするのである。

以上の授業分析法においては、参観者が授業を客観的に観察し、分析するという方法をとっているが、授業を特徴づける構成要因は複雑かつ多様であり、それらを解明するために、今日では質的な研究方法が開発されている。例えば平山満義はエスノグラフィー（民族学）法を用いた授業分析を行っている。具体的な手続きとしては、分析者として一定の訓練を受けた教育実習生を用い、彼

らが教育実習を行う4週のあいだ、授業およびそれ以外の時間において、主として指導の効果要因と思われるものについて記録を行った。そして記録された約600の要因をリスト化し、授業における学級風土と学習者の認知過程が、学習結果に影響を与えることを明らかにしたのである。また質的授業分析のもう一つの例としては、現象学的に授業を解釈するという方法がある。この方法においては、授業を研究することによって研究者自身の生と世界がより豊かになるという前提に立つ。そのうえで、1年生と高学年との間での授業における対話行為の違いや、話の聞き方の違い等について、現象学にもとづく分析を試みている。

授業分析は、観察者の主観を中心とした分析から、種々の記録にもとづく量的および実証的な分析、さらには授業の現実を多面的にとらえる質的分析へと進歩している。また、授業場面に限定されることなく、学校内での子ども関係の分析や、教育困難校での高校生と教師の意識等、学校活動全体へと研究対象も広がっている。